Ⅰ　理科って面白いんだよ

－子どもたちと子育て中のお父さん，お母さんに－

「ねえ，お母さん，これはなに？」「お父さん，これはどうしてなの？」と尋ね，見るもの，聞くもの，すべてに興味津々，それが子どもの特性です。でも，そんな好奇心が少し弱くなってきたような気がします。そして，目の色変えて実験に取り組む生徒の減少につながっているような気がするのです。

昭和 17 年，小学校に入学してから私の仕事となった茶の間の柱時計のねじ巻き，ねじを巻くときに下からのぞいてみると，歯車がかみ合い，あるものは速くあるものはゆっくり動いていました。この組み合わせで分針は速く，時針はゆっくりと動くんだと納得しました。

ラジオもそうでした。裏蓋にあいている換気のための穴から中をのぞくとガラスの真空管があやしく光っていました。電源を切り，そーっとはずしてみました。丈夫な 6 本の足，その真空管には UZ6C6 と書かれていました。「こいつが主役なんだろう」と思いました。

でも，今の機械や道具はどうでしょう。デジタル時計も携帯電話も中が見えないのです。疑問をぶっつけようにもぶっつける相手がいないのです。薄型の液晶テレビ，パソコン，新しい時代の中で活躍する多くのものが「どうなっているの？」という疑問を受け付けてくれるどころか，「君には分からないと思うよ」と冷ややかな目で見ている

ように思うのです。

そんな中で，いろいろなことに疑問を持ち，問い質し，それを解決しようとする気持ちが薄れていき，解決の方途を探り，実際に取り組んで，なんらかの結論を得ようとする，そんな理科の道筋が忘れられようとしているのではないでしょうか。

でも，子どもの本来の特性である「どうして」「なぜ」を自然そのものにぶつけて成果をあげた子どもたちがいます。その発端は，ダイニングキッチンやお風呂，庭の片隅，通学路沿いの小川などと様々です。平成 11 年 5 月に上梓した「やっぱり理科は面白い」には，こうした子どもたちが登場します。嫌いなのではなく，そんなきっかけがつかめなかっただけじゃないのかという気がします。

勿論，そのようなきっかけとなる理科の時間にしていくのは私たちの務めです。でも，子どもたち自身も「さあ，いらっしゃい」と待っていてくれる数々の施設を訪ねる積極性を持ってほしいと思います。そして，それだけではなく，身の回りの自然に目を向けてほしいと思います。

私が教員生活を始めた昭和 33 年から 51 年，忙しくなったという子どもたちの生活ですが，土曜日が休みになり，祝祭日が増え，自由に使える時間が増えました。こんな時間を使って，実際に理科の学習に役立つところに出かけてください。「さあ勉強だ」なんて気合をいれずに，遊び心で出かけてみたいものです。きっと新しい発見があり，興味をかきたて，関心を高めてくれる何かに出会えると思います。

お父さんやお母さんもつきあってあげてください。ご自身も新しい知識に巡り合い，幼かった頃に思いを馳せ，そして，新しい科学の見方・考え方に触れることができるのではないでしょうか。